現代の自殺問題に対する仏教の役割と意義

笹森行周

(北海道大学)

一 問題の所在

自殺は生物としての生存本能に抗し、自ら自己の生を終わらせようとする人間としての古くて新しい問題である。本論では仏教における捨身行、あるいはキリスト教におけるキリスト十字架上の死、その他宗教上における殉教等は、死そのものが目的ではないので、それらの行為を自殺とは呼ばない。

現在自殺が社会問題とされる背景には、現代世界特有の様々な問題が潜在するであろう。しかしなせもつとも尊い生命を自ら絶とうとするのか。自殺を乗り越えて生きることができないのか。そもそも不殺生戒を第一義に説く仏教は自殺をどう捉え対処し、自殺を回避する教えをどのように説いているのだろうか。

本論はこのような観点から現代における自殺に対して、仏教の具体的な取り組みを検証し、仏教が自殺問題に対して、どのような役割と意義を持つことができるのかを考察したいと考える。それはまた仏典に説かれた生命観が現代世界の自殺問題に対し、どのような指針を与えることができるのかを模索することになり、自殺問題に対して示される指針は、人類が直面する様々な現代的問題にも対応することになると考える。

二 自殺の現実

日本は一九九八年以来、年間三万人を超える自殺者を出し続けている。その特徴の一つは、中高年が自殺者の半数以上を占める「中高年自殺」であり、もう一つはインターネットを介して知り合った者同士が自殺を共にする「ネット自殺」という現象である。また最近はいじめによる年少者の自殺も急増している。

日本は二度の世界大戦という激動期を経ながらも困難な戦後を生き抜いてきた。第二次世界大戦の敗戦から教訓を学び、平和国家建設をめざした日本は、終戦後現在に至る六五年間に亘り、他国との戦争も紛争もない歴史を作り上げ、現代世界に冠たる長寿国となり、平和で安定した国家を築き上げてきたのである。しかしながら日本社会の実態は、前述したような自殺者の急増という問題に直面しているのである。

「中高年自殺」について、精神科医で自殺予防に取り組んでいる高橋祥友氏は、複合的な要因が自殺の急増をもたらしたとし、特に働き盛りである四〇〜五〇歳代男性の自殺急増の要因について、不況の影響はもちろんであるが、年齢的に中年危機を迎え社会変化に対応しきれない中高年の姿を指摘している。⁽²⁾ こうした中高年意識が形成されてきた背景には、戦後日本社会が経済発展をする中で抱えてきた問題が影響していると考ええる。

山梨県の富士吉田署管内には自殺の名所として知られる「青木ヶ原樹海」が存在する。ここが自殺の名所となったのは、一九六〇年に松本清張が発表した小説『波の塔』がきっかけとされる。小説はヒロインが樹海に入り、睡眠薬自殺を図ろうとするところで終わる。その後小説はテレビドラマ化され、影響を受けた人々が自殺の場所として選ぶようになり、自殺名所として有名になるのである。

マスコミの過熱報道が自殺を大規模に引き起こす契機になったと考えられる例もある。一九八六年四月、アイドル歌手岡田有希子の自殺が起き、マスコミは連日報道を繰り返した。その後、後追い自殺と考えられる青少年の自殺が相次いだ。二〇〇三年、埼玉県入間市において、インターネットの自殺系サイトを通じて知り合った、男性一名女性二名がアパートで練炭を焚き、一酸化炭素中毒により自殺した。マスコミは「ネット自殺」としてセンセーショナルに取り上げ、その後同様の集団自殺が連続して起きた。

また一九九三年、『完全自殺マニュアル』が出版され、百万部の大ベストセラーになった。本の内容は自殺の方法を具体的に説明したもので、著者の鶴見済は「生きるも死ぬも勝手なことだ」⁽³⁾と本の中で主張している。しかし問題は、この本に触発され自殺した若者が全国各地に多く出たという現実である。そのため、この本を有害図書に指定する自治体が日本各地に出た。

『完全自殺マニュアル』がベストセラーになり、「ネット自殺」が頻繁に行われることは、現代社会の危うさを私達に提示する。その危うさとは、生きることの意義を見出せなくなった大勢の人々の出現を意味する。「生きるも死ぬも勝手だ」という人生観は、自殺に対する感覚を麻痺させ、さらには生命軽視の人生観より持ち得ないことにもつながるだろう。

時代の変遷と共に生命観も変化し多様化する。自殺についてもその時代特有の影響を受ける。文明の発達は生活の利便性を増し、平均寿命を延ばした。しかし世界に冠たる長寿国の日本において、自殺が大きな社会問題となるのは、文明発達の陰に病める世界があるという現実を象徴的に示しているのではないだろうか。

しかし、こういう日本の現実の他に、世界には数知れない多くの生命が自殺だけに限らず、今現在なお、不条理な

形で終えられようとしている現実もある。私は一九八七年から一九九二年までの約五年間、内戦に苦しむ中米のニカラグアで修行する機縁を得た。ニカラグアに赴くことになったのは、当時のニカラグアで外務大臣を務めていた、メリノール会所属のカトリック司祭、ミゲル・デスコート神父から、新しい国づくりを進めているニカラグアで、日本人仏教僧侶として平和の祈りを捧げて欲しいという要請を受けたからである。

内戦と経済封鎖で疲弊するニカラグアの平和祈念のため、私は一九八八年八月六日から首都マナグアの革命広場で四〇日の断食に入り、ニカラグアの平和を祈り続けた。その時の忘れられない出来事の一つに、まだ年端の行かない一人の少年との出会いがある。

断食に入って二、三週間過ぎた頃、一人の十歳ほどの少年が唱題行を勤めていた私に歩み寄り、「殺してくれ」と嘆願してきたのである。私は唱題を止め、少年に「なぜ死にたいのか」と問うた。少年はポツリと「何も希望がないから」と言い残し、その場から立ち去った。少年の栄養失調にくぼんだ眼には、子供特有の輝きが失せ、私の心には子供ながらに何時自殺してもおかしくない、少年の淀んだ眼差しが残像として残った。少年に対し何もしてやることができなかったことに、私は言いようのない虚しさと無力感に襲われた。

その力のない「殺してくれ」という少年の声が、二〇年経った現在でもふと私の心に木霊する時がある。内戦のニカラグアでたびたび戦争地域の行脚を勤め、親を失った多くの子供達と、彼等の親の墓参りを共にし涙を流した。こういう事実も合わせ、仏教の生命観を通じて生命の大切さを認識し、それを現代世界に伝えたいと思う。

三 自殺問題に対する取り組み

政府は平成十年から自殺者数が毎年十万人を超え続けた事態を受け、平成一八年「自殺対策基本法」を成立させた。その内容は、関係省庁が自殺対策を総合的に推進することで、自殺防止、自殺者の親族に対する支援体制の充実を図ること等が盛り込まれている。

この「自殺対策基本法」が制定されて以降、全国の自治体が自殺対策に取り組んではいるが、現在に至る間も年間三万人を超える自殺者が出ている状況に変化はないのである。むしろ二〇〇八年の世界同時不況を受け、自殺者が増加することが懸念されている。

民間の自殺問題に対する取り組みには、次のようなものがある。

- ① 「いのちの電話」 民間がボランティアで行っている全国組織の電話相談。
- ② 「自殺実態解析プロジェクトチーム」 NPO法人ライフリンクが学識者・医師・弁護士と共に立ち上げたプロジェクト。自殺統計を基に詳細な自殺分析に取り組む。
- ③ 「自殺防止センター」 イギリス発祥のボランティアによる電話相談で、「いのちの電話」相談と類似する活動である。国際ビフレンダーズ (Betwixt and Between Worldwide) に加盟し、日本支部として国際的なネットワークの一端として活動する。

- ④ 「日本自殺予防学会」、国際自殺予防学会 (本部フランス) の会員。毎年各地の「いのちの電話」センターと共済で、「日本自殺シンポジウム」を開催。年一回学会機関紙の『自殺予防と危機介入』を発行。

このような民間の自殺対策に取り組む積極的な動きに対し、仏教界の対応はにぶいとされる。しかし仏教界の中においても徐々にではあるが、自殺防止に対応する活動は多くなっている。その中で次のような取り組みがある。

①「自殺対策に取り組む僧侶の会」東京に近在する超宗派による僧侶が立ち上げた有志の会。自殺に関する相談を手紙で受け付け、僧侶が一通一通に手書きで対応する『自死の問い・お坊さんとの往復書簡』を行っている。

②「第二四回世界仏教徒会議日本大会」二〇〇八年十一月、東京で開催。二三カ国から約六百人が参加し、終末期医療や自殺予防について活発な議論が行なわれた。

このような自殺に対する地道な活動の積み重ねが現在もつとも必要とされていると考える。現実世界における仏の慈悲の顕現は、仏の心を体現しようとする修行者によって始めて具現化されるのである。「自殺対策に取り組む僧侶の会」のように超宗派の僧侶による活動は、仏教界の中に自殺対策に取り組む僧侶が少なからずいることを示すものでもある。あるいは「世界仏教徒会議日本大会」のように、国際的な議論と協力も必要であり、さらに民間との連携も重要になるだろう。

「朝日新聞」は、二〇〇七年九月十日の「世界自殺予防デー」を前に、自殺予防に取り組む仏教界の現状を報告した。記事は仏教が自殺に取り組む事例として、千葉県成田市にある「自殺志願者駆け込み寺」長寿院住職篠原鋭一師、日本でもっとも自殺率の高い秋田県で活動する自殺予防の住民グループ「心といのちを考える会」会長、藤里町月宗寺住職袴田俊英師等の活動を紹介している。そして記事は、自殺予防に関する仏教界全体の動きが鈍いとされる理由について、末木文美士氏の「そもそも仏教には自殺を必ずしも否定しない面もあり、この問題がなじみにくいことがある⁽⁵⁾。」というコメントを紹介している。

四 仏典に見る自殺の事例

(1) 律文献に見る自殺

仏典には様々な自殺の事例が取り上げられている。自殺についての記述があるのは主として仏教經典の律藏であり、『パーリ律』に次のような物語がある。

その時一比丘、憂愁に心くだけ、耆闍崛山に登りて断崖に身を投げるに、一箆師の上に墮ちて「彼を」死せしめたり。彼に悔心生ぜり……乃至……「比丘、波羅夷に非ず、然れども諸比丘、自ら投身すべからず、投ずる者は突吉羅なり」と。⁽⁷⁾

このように述べ、一人の比丘が憂愁に心くだけ投身自殺をはかった。ところが偶然にも下にいた籠作りに当たり、籠作りは死んでしまったものの、投身自殺をはかった比丘は命を落とすことはなかった。比丘は後悔の念を生じ、仏の助言を仰いだ。

仏は「波羅夷罪には当たらないが、自ら投身(自殺)をしてはいけない。投身する者は突吉羅罪である」と述べ、自殺は突吉羅罪であると規定した。突吉羅罪とはもともと軽い罪で、本人が心の中で悪いことをしてしまったと反省懺悔すれば許される軽罪である。

大衆部伝承の『摩訶僧祇律』では、比丘が投身自殺を図り、竹作り親子の父親に当り父親の命を奪った。仏は比丘が不淨觀を得んとしてこれを修し、その結果、身を厭うた末の行為であることを聞き質した上で、「比丘、汝、下を看ずして自ら投ぜんには越毘尼罪を得ん」と述べた。⁽⁸⁾

この仏の言葉は比丘が投身自殺を行なった際、下にいた竹作り親子の父親の命を奪ったことに対してなのか、あるいは比丘の自殺に対するものなのかは判然としない。しかし命を奪ったことに触れてはいないので、自殺に対する罪として対処したものと考えられる。越毘尼罪とは突吉羅罪と同じく軽罪である。

しかしこの場合、投身自殺を計ったことにより、殺された竹作り親子の父親に対する殺人罪は不問に付されたことになる。仏の説いた不浄観により自殺志望を強めた比丘達に対する、自殺幫助のいかなる殺人も波羅夷罪と定めていることを勘案するならば、投身自殺する際に下方を見ず、自らの身で全く関係のない竹作り親子の父親の命を奪ったことは、偶然の事故として処理され、殺人罪に相当するとは考えられなかったものなのだろう。つまり殺意がなければ殺人罪は成立しないとされたのである。

説一切有部伝承の『十誦律』に説く投身自殺を扱った事例では、下にいた狐が死んで、自殺者本人の背筋は直った。仏は比丘が投身自殺を計り、狐を殺したことについては無罪とした。また自殺について戒めはしたが、自殺が戒律に触れる事についての言及はない。それどころか投身自殺により、ぶつかつた狐は死んだものの、投身自殺を行なった当人は、狐との衝撃で曲がっていた背中が直つたと伝える。

このように自殺は『パーリ律』では突吉羅罪とされ、一人で懺悔すれば許される一番軽い罪であるとし、『摩訶僧陶律』では越毘尼罪とされ、五衆罪の一つで突吉羅罪に相当し、共に軽罪で懺悔すれば許されるとされた。また『十誦律』では、仏は自殺を戒められはしたが、戒律に触れるという言葉及はない。

しかし後述するように、自殺した者に対し解脱しているので戒律に触れることはないという事例を經典の中に挙げていることを鑑みるならば、解脱しないまま自殺した者は、問題とされたのであり、戒律に抵触するとされたのであ

る。したがって仏教全体としてみるならば、仏教は自殺を奨励しないし、マイナスの価値であると考えられていたと見ることができよう。

(2) 経典に見る自殺

『雜阿含經』卷第二十九には仏が不淨觀を説いたため、不淨觀を修した比丘たちが自分の身体を厭うようになり、自殺する者が続出した。また殺すように頼まれた鹿林梵志子は次々と比丘たちを殺害し、その数六十人に及んだ。⁽⁹⁾

仏は比丘たちの数が少なくなったのに気づき阿難に尋ねた。事情を知った仏は引き起こされた悪不善法を消滅するために法を説き、数息觀を用いて自殺者とそれに伴って引き起こされた自殺幫助の殺人という、悪不善法に対処されようとした。しかし自殺に関しては特に言及していない。⁽¹⁰⁾

この同じ物語は律の『四分律』・『五分律』にも載せられている。ちなみに『四分律』では、自殺に関して直接の言及は見られないが、自殺に関係する殺人・自殺幫助等は波羅夷罪であるとした。⁽¹¹⁾ しかしながら仏は戒を制定する以前の自殺は無犯であるとしている。⁽¹²⁾ 『五分律』では自殺について未遂罪等の諸罪である偷羅遮罪としている。⁽¹³⁾

このことから当時の仏教教団にあっては、自殺を戒律で制定するような事態は、仏が不淨觀を説いてから後のことであり、それまでは教団全体の問題として自殺を採り上げるような事態は起っていなかったと考えられる。

しかし戒律もその根本は修行者自身の救済を目的として設定されたもので、仏は修行者の機根に合わせて対機説法を行なった。自殺に関しても様々な状況に応じて、仏はその対処法を変えている。

『雜阿含經』卷第三十九では尊者瞿低迦が修行に精進し、その結果、一時的な心解脱を得たにもかかわらず、退転

してしまうことを六回も繰り返してしまった。尊者瞿低迦は肉体があるゆえに退転を余儀なくしてしまうことを憂い、不退転の解脱を得るために自殺を決定し実行した。

仏は瞿低迦の自殺について、「是の如き堅固の士は一切求むる所無し。恩愛の根本を抜き瞿低迦は般涅槃せり」⁽¹⁴⁾

と述べ、尊者瞿低迦は般涅槃したのだと説いた。つまり仏は解脱者としての尊者瞿低迦の自殺は認められたのである。

同じく『雑阿含経』巻第四十七では、仏が王舎城の迦蘭陀竹園に住していた時、闍陀は重病に罹り苦しんでいた。

しかも病苦は堪えられないほど辛く益々病は重くなり、回復の見込みは無いと嘆き闍陀は自殺した。これについて経は「世尊は彼の尊者闍陀の為に第一の記を説きたまえり」⁽¹⁵⁾と述べる。すなわち仏は闍陀が第一記（般涅槃）してたと説き、闍陀の自殺は解脱者の自殺であるとして許容されたのである。

『雑耆阿含経』巻第十九では婆迦梨が病苦のゆえに、肉体ばかりではなく精神的にも疲弊し、自殺を選択したことが説かれている。婆迦梨は心身ともに追い詰められ死を選択した。しかし婆迦梨は挫折感が因となり、自殺の直前に五盛陰の無常を悟ることになったと仏は説いた。仏は婆迦梨が自殺する直前に解脱したので、婆迦梨の自殺は解脱者の自殺であったとしてその自殺を認められたのである。⁽¹⁶⁾

このように見てくると、律文献では各部派の伝承によって多少の違いは見られるものの、仏は自殺を破戒であるとして戒めた。しかし原始教典に説かれた瞿低迦・闍陀・婆迦梨の三事例は、解脱者の自殺であるとして仏は許容された。つまり仏は、自殺が戒律に抵触するとしながらも、解脱者の自殺は特例として許容されたのである。

(3) 論書に見る自殺

これまで見たように自殺について律文献では軽罪であるとし、經典の三事例は自殺した比丘について、自殺直前に解脱していたので戒律に触れることはないとした。しかし論書に説かれる自殺は、自殺を行なったとしても自殺者自身が殺罪に問われることはなく、自殺は殺生戒には触れないとの立場をとる。

『大智度論』は自殺を殺罪に相当しないと説く。罪は他を悩ますことで生ずるのであり、自殺は他を悩ますことにはならず、したがって自殺により罪が引き起こされることはないとした。罪は「愚痴・貪欲・瞋恚の咎あり⁽¹⁷⁾」と述べ、三毒故に引き起こされると説いた。

また『寶積經』の部分的注釈書で、六世紀北魏の菩提流支が訳出した作者不明の論書、『弥勒菩薩所門經論』では自殺と他殺を分け、殺人はあくまでも他人に対しての行為であると定義し、自ら自分の命をとる自殺は殺すべき対象がないので殺人には該当しないと説いた。殺すべき対象がないのであるから、たとえ自殺しても悪法を得ることはなく、過去から現在に引き継がれる固定的の自己というものもないのであるから、自殺は殺罪には相当しないと説いたのである。

しかしそのような主張は詭弁ではないのかという問いに対しては、羅漢の中には悟りに到達した境地から退転することを恐れ、自殺を企てた者もいた。しかし羅漢が自殺したとしても罪を作ることではなく、その理由は三毒から解脱していたゆえであるとしている。したがって自殺することにより、殺罪を犯すことにはならないと説いたのである。⁽¹⁸⁾

ここで明らかになることは『大智度論』・『弥勒菩薩所門經論』ともに、殺罪は他人を殺すことにより科せられるのであり、自ら命を絶つ自殺には適用されないとした。罪の概念は相手を悩ますところに生じるのであり、相手を悩ま

す根本は三毒であると説いたのである。

したがって三毒が罪を引き起こす根本原因であるとする。それゆえに三毒を解脱している羅漢が自殺したとしても罪を得ることはないとしたのである。これは経蔵で見た瞿低迦・闍陀・婆迦梨の三人の自殺は解脱者の自殺であると、仏は許容されたという事例とも合致する。

しかし、このように自殺自体が殺罪には該当しないと説く論書の事例は、仏教の第一義である不殺生戒との齟齬をきたす矛盾に陥ることにはならないのだろうか。それに対して論書は、仏教の第一義は解脱を求めることにあり、解脱を妨げる主要因である三毒の滅却が根本解決につながるのであり、一切の罪は三毒を根本原因とすると説いた。それゆえに三毒を滅していれば自殺をしたとしても罪は引き起こされないと説いたのである。

五 ま と め——仏教の果たす役割と意義——

このように仏は自殺に対し、基本的には戒律に触れるとしながらも、自殺そのものに関しては軽罪として処置されている。また自殺者が自殺直前に解脱していたとし、解脱者の自殺は戒律に抵触することはないと説かれたこと等を鑑みるならば、仏は自殺の事例ごとに対処しようとしたことがうかがえるのである。

先行研究は仏がそのような自殺対応をした背景について、当時の仏教教団においては、自殺という問題がまだ新しい概念で戒律制定の規程が定まっていなく、仏教が業を重視するために善悪の判断は結果ではなく、その動機が重視されたと指摘する。また解脱者の自殺が容認されたとしたのは、仏の自殺者に対する慈悲心であると同時に、死の問題の最終解決は、解脱に至ることであるという、仏教教義が根底にあると指摘している。⁽¹⁹⁾

仏在世の時代と現在では、時代背景も自殺者数も異なる。しかし人間が絶望感に陥り、自殺しようとする心情には、共通するものがあるであろう。仏典に取り上げられた投身自殺を計った事例では、偶然下にいた人にあたり、当てられた人は死亡したが投身自殺を行なった本人は、死亡した人が緩衝となり助かった。仏はこれらの自殺に対しては軽罪とされている。ちなみに偶然死亡させたことに關して、仏は殺意がなかったので無罪とされた。

また經典に三例取り上げられた、解脱者の自殺とみなされた原因は、「解脱に到達しても一時的であり、不退転の解脱を得るため」(一例)、「病苦から逃れるため」(二例)である。これらの自殺に關して、仏は自殺する直前に修行者は解脱に到達していたとし、解脱者の自殺は許容されたのである。

このように見ると、仏在世における自殺の原因は不淨觀に取り付かれ、あるいは憂愁と欲望に悩まされたことから来る絶望感であり病苦である。現代における自殺の原因は、『自殺実態白書』の報告によれば、自殺の背景には様々な「危機要因」が潜んでいるとし、それら様々な「危機要因」が「うつ病」を引き起こし、「うつ病→自殺」という、危機連鎖の経路を辿る事例が多いと報告している。⁽²⁰⁾

つまり自殺の原因を構成する背景は、病苦と様々な要因に基づく精神的苦悩が原因である。仏在世と現代世界では異なるが、自殺の原因は共通し、精神的苦悩と肉体的病苦であるといえるだろう。仏在世の当時とは比較にならないほど、文明が発展し医学が進歩した現代世界ではあるが、精神的苦悩と病苦とが自殺に至る主要な原因をなすのに変わりがないことが分かるのである。

しかしながら仏が自殺について示された対処法は、全て出家した仏弟子に対しての事例であり、仏典には一般の人々の自殺例についての言及はない。では現代世界における一般世間の人々の自殺に対して、仏はどのような対処法

をとることになるのだろうか。

先に仏在世の時代と現代世界の自殺の事例とを検証した結果、自殺の原因が共通することを見た。時代を違え、修行者と在家者とを違えども、自殺の原因が共通することは、仏が示した修行者に対する自殺対処法が、現代における一般の人々の自殺に対しても適応されるということになるだろう。

仏が示した自殺対処法は苦しみに沈む修行者を救い、生きることへの希望を与えようとした慈悲の心に基づくということができる。この仏の示した慈悲の心は、仏教の根幹を成す倫理観でもある。『大智度論』にいうように、大慈とは衆生に安樂を与えようとする心、大悲とは衆生の苦しみを取り除こうとする心の働きであり、慈悲とは抜苦与樂の徳目の表れであるとする。この仏の慈悲心が現代に自殺を余儀なくされようとする人々へも注がれ、自殺という窮状に陥った人々の苦悩を取り除き、生きることの喜びと意義を喚起することになると考える。

この仏の大慈大悲の心を具現することが、現代世界に仏道修行を行じる者に課せられた使命であろう。それが仏の自殺対処法を現代世界に示現する修行になると考える。そのことはまた自殺対処の修行を通し、人間の生命を尊重する大きなうねりを、人々の心に呼び起こすことにつながることもなると考える。

統計に表れた自殺者数だけでも、この十年間毎年三万人以上が自ら命を落とした。おそらくはその何倍もの人たちが自殺を考え、逡巡したことだろう。自殺に踏み切るか、思い留まるかは、それぞれ事情が異なるであろうが、精神的な支援の手を伸ばすことで、自殺を思い止まる人の数は確実に多くなるであろう。

自殺防止対策に取り組んでいる各組織の具体的方法は、対面であれ、電話であれ、手紙であれ、「自殺を考えた人の悩みを聞く」という方法を取る。これは民間と仏教者とを問わず、自殺防止対策の基本姿勢であろう。

このような自殺防止対策の基本姿勢に応えるためにも、今仏教者としてできることは、これら自殺を考えて苦悩する人々の声を徹底的に聞くということであり、寺に悩みを持って来る人を受け入れると共に、積極的に自殺を考える人の前に立とうとする姿勢であろう。僧侶自ら争いのあるところ苦悩のあるところに赴き、自らの問題として共に解決を目指そうとする修行が求められているのである。

具体的には自殺予防に関する対策と行動を超宗派で起こす必要があると考える。前述した「自殺対策に取り組む僧侶の会」が超宗派で活動し、また悩みを持つ人を受け入れる「駆け込み寺」の事例が報告されている。この活動をモデルとし、各宗派が全国的に同様の対策を展開することができれば、自殺予防の大きな力になり得ると考える。

そして仏教寺院が救いを求める人々を広く受け入れ、「駆け込み寺」としての機能を果たすとき、その活動は自殺対策ばかりではなく、様々な苦悩に呻吟する人々の救済にもつながると考える。そのことはまた現代世界に生きる仏教の姿を示すことにもなり、ひいては仏教寺院が苦悩を克服し新たな人生を生きるための、蘇生の場を提供することにもなると思われる。

註

- (1) 内閣府編『自殺対策白書（平成二〇年版）』九頁（佐伯印刷、平成二〇年）。
- (2) 高橋祥友『自殺予防』一二頁（岩波書店、二〇〇六年）。
- (3) 鶴見済『完全自殺マニュアル』一九五頁参照（太田出版、一九九三年）。
- (4) 「仏教、自殺とどう向き合う」二五頁『朝日新聞』二〇〇七年九月七日号（朝刊）。
- (5) 同前。

- (6) 以下の論考に先行するものに拙論「仏教に於ける生死観」（北海道哲学会編『哲学年報』五十四号、二〇〇七年）。「仏教では自殺をどう見るか」（『印度哲学仏教学』第二十三号、平成二〇年）がある。本論はそれらをふまえたものである。

- (7) 『南伝大藏経』第一巻「第三波羅夷」一三、一三六頁。
 (8) 『摩化僧祇律』卷第二十九（『大正蔵』二二卷 四六七頁上段）。
 (9) 『雜阿含経』卷第二十九（『大正蔵』二卷 二〇七頁中〜下段）。
 (10) 『雜阿含経』卷第二十九（『大正蔵』二卷 二〇七頁中〜下段）。
 (11) 『四分律』卷第二（『大正蔵』二二卷 五七六頁中〜下段）。
 (12) 『四分律』卷第五十六（『大正蔵』二二卷 九八〇頁中〜下段）。
 (13) 『五分律』卷第二（『大正蔵』二二卷 七頁下段）。
 (14) 『雜阿含経』卷第三十九（『大正蔵』二卷 二八六頁中段）。
 (15) 同前、三四八頁上段。
 (16) 『雜耆阿含経』卷第四十七（『大正蔵』二卷 六四三頁上段）。
 (17) 『大智度論』卷第十二（『大正蔵』二五卷 一四九頁上段）。
 (18) 『弥勒菩薩所問経論』卷第四（『大正蔵』二六卷 二四九頁下段）。
 (19) 藤田宏達「原始仏典にみる死」（『仏教思想』一〇 死 七八頁、平楽寺書店、一九八八年）。石井公成「不殺生と殺生礼賛（戦争）——仏教と戦争との関わり——」（『現代と仏教』一九六頁、佼成出版社、二〇〇六年）。関稔「自殺考」（『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』二六七頁、平楽寺書店、一九八九年）。
 (20) 自殺実態解析プロジェクトチーム編『自殺実態白書 二〇〇八【第二版】』一五一—一八頁参照（NPO法人 自殺対策支援センター・ライフリンク、二〇〇八年）。
 (21) 『大智度論』卷第二七に「大慈与一切衆生楽。大悲抜一切衆生苦。大慈以喜樂因縁与衆生。大悲以離苦因縁与衆生。」という。（『大正蔵』二五卷 二五六頁中段）。